

I 部 購買力平価式

第I部では、貿易市場における裁定問題を扱い、為替レートの「長期的な趨勢」がどのように決まってくるのかを議論する。

ここでは、為替レートが「物価」とどのような関係があり、デフレと円高との関係性について理解することを目標とする。今後の為替相場の「長期的な趨勢」を読み取りたいと考えている受講生は注意深く聴講してもらいたい。

Lecture Note 1 (「裁定-価格差からのもうけをねらった行動」)

1. 裁定とは?

裁定とは、()を利用して、()を得る行動である。
他方、価格差を利用し、リスクをとってもうけをねらう行動は、()といい、
裁定と区別する。

裁定は、(), すなわち、
価格体系の「ゆがみ」を解消する。

2. 貿易における裁定

次の例を使って、貿易における裁定を検討しよう。

例) シャープ・ペンシルの価格は、日本で100円、米国で1ドル。
為替レートは1ドル=120円。

この例では、()でシャープ・ペンシルを仕入れ、()で販売するという
裁定が行われることになる。その理由を説明しよう。

(1) 日本で1万本仕入れ、米国で販売するものとする。

(2) 日本での仕入れにかかる費用は、100万円。

なぜ?

日本のシャープ・ペンシルの価格が100円なので、
() = 100万円

(3) 米国での売り上げは、1万ドル。

なぜ?

米国のシャープ・ペンシルの価格が1ドルなので、
() = 1万ドル

(4) この1万ドルを円に換える．その結果，120万円になる．

なぜ？

為替レートが1ドル=120円なので，

() = 120万円

(5) ()万円を**確実に**もうけることができるので，人々は，()でシャープ・

ペンシルを仕入れ，()で販売するという裁定を行う．

2．購買力平価条件

文字式を使った一般的な形で検討してみよう．

シャープ・ペンシルの価格は，日本で p_J 円，米国で p_A ドル．

為替レートは1ドル= S 円．

(1) 日本で M 本仕入れ，米国で販売するものとする．

(2) 日本での仕入れにかかる費用は， $p_J M$ 円．

なぜ？

日本のシャープ・ペンシルの価格が p_J 円なので，

() = $p_J M$ 円

(3) 米国での売り上げは， $p_A M$ ドル．

なぜ？

米国のシャープ・ペンシルの価格が p_A ドルなので，

() = $p_A M$ ドル

(4) この $p_A M$ ドルを円に換える．その結果， $S p_A M$ 円になる．

なぜ？

為替レートが1ドル= S 円なので，

() = $S p_A M$ 円

(5) この取引の収支は、 $Sp_A M - p_J M$ 円

この収支が正である限り、人々は(1)から(3)までの()を行う。

(6) しかし、()より、裁定が可能な状況は長続きしない。

やがて収支は()になる。すなわち、次式が成り立つ。

$$()$$

さらに、両辺を M で割って整理すると、次式が得られる。

$$()$$

(7) 実は、同様の議論がシャープ・ペンシル以外の財にも成り立つので、

シャープ・ペンシルの価格を物価水準に置き換える。

ここで、物価水準とは、すべての財の価格の()である。

日本の物価水準を P_J 、米国の物価水準を P_A とし、それぞれ p_J 、 p_A と置き換えると、次式が得られる。

【絶対的購買力平価式】

貿易においては、日本の物価水準 (P_J)、米国の物価水準 (P_A)、為替レート (S) の間に、次の関係が成り立つ。

$$P_J = SP_A$$

この式のことを()という。

購買力平価条件は、世界経済における()である。

このとき、為替レート (S) は次のように決まる。

$$S = P_J / P_A$$

この式のことを()という。

【相対的購買力平価式】

なお、ある定数を k とおいたとき、為替レート (S) が次のように決まるとき、

$$S = k \times P_J / P_A$$

この式のことを()という。

3. 購買力平価条件の不成立

実際のデータでみると、購買力平価条件は()。

理由1) 物価水準が(), つまり、スムーズに変化しない。

理由2) 情報の()が存在する。
()の機会を即座に見つけ出すことはできない。

理由3) 裁定を行うこと自体に()がかかる。
輸送費、輸送を手配するためにかかる時間、宣伝費、関税など

ドリル1

- (1) 購買力平価条件を表す式を書け。
- (2) 実際のデータでみると、購買力平価条件は、長期的には成立しているが、短期的には成立していない。その理由をあげよ。